

はじめに — 人と川の潜在力

8回目を迎えた『「川の日」ワークショップ in 矢作川』の最終選考会と表彰式の間、豊田市参合館のコンサートホールでは、パイプオルガンのライブ演奏があった。バッハのフーガのメロディは、まるで河川に赴く人々のふるまいと無限に生成する河川の相互関係の豊かさを歌いあげるかのようであった。

発表者と選考委員の間の応答過程には、いくつもの重要なキーワードが見え隠れしていた。小生は、それらを最後に漢詩4行詩風に束ねてみた。

風景育心
流域響存
悠遊再生
律動創発

最初の横の一行目「風景育心」は、直接的には石垣島の新川川の活動発表の中で、「美しい風景は人の心を美しく育む」の言葉が提起されたことによる。しかし、他にも同意のことが違う次元で語られていた。大東京の市街地を横切る荒川では、川からみる風景が写真によって表現されていた。荒川と周辺環境とゆるやかに連続する写真は、川の無限そのものをカタチとして表現していた。人々は風景の美しさや意外性を表現することによって、美しいココロや感受性を育んでいくものだ。

2行目の「流域響存」。城原川に見られる草堰や野越などの伝統的な治水技術がもたらした風景は、人々の記憶に宿るやわらかい場所である。城原川は流域コミュニティの協働による流域力を相互に響きあわせつつその存在価値が維持されてきた。「しあわせな川づくりは、しあわせな森づくり」と上流の生命環境の育くみが川全体のしあわせに響くという視点を具体の活動をもって示した矢作川も注目された。

3行目の「悠遊再生」。片桐松川では、20年間にわたってPTA責任による子ども自由遊泳環境を育んできた。そこには悠遊とした広がりのあるココロと持続的の行為が、川とカワガキの生き生きとした関係を再生させたことが語られている。人間が50年かけて汚した川の再生には150年かかるとしたちっこ川は、他の筑後川の多様な活動とセットにして、人間—河川相互浸透関係づくりの運動の総合力の高さから「特別賞」（島谷賞）を獲得した。

4行目の「律動創発」。小川原湖での子どもの水環境とたくさんの生命へのかかわりによるはずむ心は、リズムカルな生き方の創発をあらわしている。大都市部の寝屋川では、ええかっこだけの「市民」とよそもん排除の「住民」が対立を力にしつつ、リズムカルな協働の関係を結んでいったことも見逃せない。

漢詩はたてによむもの。たてに読んでも1行毎に意味深い。斜めに読んでも意味がある。しかしここでは省かざるをえない。ともあれ、いい川・いい川づくりの公開選考会は、回を重ねるごとに人と川の潜在力の無限エネルギーの流れが今後とも続くことを予感させてくれる。次年度さらなる潜在力の表現と交流と相互触発の場となることを期待したい。

2005年8月

「川の日」ワークショップ総合コーディネーター
NPO 法人まちの縁側育くみ隊代表理事
愛知産業大学大学院教授

延 藤 安 弘